

## 2022 年 一橋 日本史 講評

出題分析		
<b>試験時間</b> 120 分	<b>配点</b> 学部により異なる	<b>大問数</b> 3 題
<b>分量 (昨年比較)</b> [減少 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">同程度</span> 増加]		<b>難易度変化(昨年比較)</b> [易化 同程度 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">難化</span> ]
<p><b>【講評】</b></p> <p>2022 年の一橋日本史の大問 1 は、去年が古代・中世以降からの出題であったために近世以降からの出題であった。また、大問 2、大問 3 はともに近代からの出題で戦後史は出題されなかった。今回の問題で特に目を引くのは、難易度の高い文化史関連の問題の数の多さ、3 つの大問とも共通する、最後の問への字数配分の偏りである。大問 1、3 の問題に関しては過去問が参考にならず、文化史の比重が大きかったために、過去問のみで対策していた受験生にとっては手も足も出ない状態になってしまっても何ら不思議ではない。大問 1 や 3 に関しては、文化史の難易度が非常に高く、ともに最後の問で大幅に字数を稼ぐ必要があるため、この問が思い浮かばなければ白紙状態になる可能性があるうえ、その問自体も簡単に書ける代物ではない。倫政やビジネス基礎に逃げるできない現状では非常に厳しい問題構成。その中でもひととき難しいのが、大問 1 の問 5 であり、過去問では聞かれたことがない視点の上、鉱物資源開発と利用という一般的な日本史の知識も希薄であろうこの問題で字数を 300 字も書かないといけないという鬼畜さ(簡潔に書け、とは??)。大問 1、3 で書けない部分を大問 2 で補うしかないのであるが、大問 2 に関しても問題の聞き方が曖昧であり、「1918 年」であったり「1880 年代」であったりといった年号から推測しなければならず、決して書きやすくない。大問 1 の問 3 の秋田蘭画は教科書の範囲を著しく逸脱するものであった。また、大問 3 の問 4 は去年の東進本し模試の第 2 回がほぼ的中している。確実に、<b>過去 40 年で見ても最高難易度の問題構成である。</b></p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	鈴木牧之と菅江真澄/天明の飢饉・寛政の改革/明徳館/秋田蘭画成立の経緯、阿仁銅山・鉱山被害が深刻化した背景	<p>今年の一橋日本史の中で最も難易度が高い大問である。過去問対策で役に立つことがほぼ皆無であり、文化史に偏重した大問。比較的難易度が抑えられている短答問題を落としてさえいなければほぼ受験生との間に差はつかないと思われる。問 3 の秋田蘭画については教科書の範囲を大幅に逸脱している(後述)のは明らかであるし、問 5 の鉱山被害の背景となる鉱山開発、技術については、教科書自体に鉱山開発史について子細に書かれているわけではなく、また大学受験日本史のテーマとして扱われることは非常に稀であるため、社会経済史や政治法制史に時間を使う必要のある一橋受験生は大いに困惑したはず。書けなくても何ら気にする必要はないと思われる。問 1…鈴木牧之。「北越雪譜」。<b>やや難。</b>問 2…(b)天明。(c)寛政。<b>標準。</b>問 3…明徳館。<b>標準。</b>問 4…超難問。阿仁銅山は何とか答えられるかもしれないが、それ以外は非常にマニアックな知識であるし、正直に言って自身にも知識がなかった。山川の日本史用語集 p197 の小田野直武の説明部分には、「秋田藩士。平賀源内に洋風画を学び、『解体新書』の挿絵を書く。」という記述があったが、秋田蘭画についての説明は皆無で名前すら見当たらない。詳説日本史研究を見てみると、p299 に、「秋田藩では和洋折衷の独自の絵画も生まれた(秋田蘭画)」という記述があり、ようやく秋田蘭画の説明が見られた。鉱山開発の指導のために秋田を訪れた本草学者の平賀源内が小田野直武の画才を見つけ、遠近法や陰影法など洋画法の知識を伝えたことで、のちに「解体新書」の挿絵を描いた小田野直武は和洋折衷の秋田蘭画の祖となった(仙台市ホームページ参照)。しかし、これを論述試験で書かせるのは酷ではないか。そもそも一橋日本史は社会経済史や政治法制史という非常に重いテーマを抑えることが必須で、その対策に非常に時間がかかるのであるが、このような文化史の中でもマニアックな部分にまで気を配らなといけないとなると暗記すべき量が一気に膨大化する。今後は捨てる必要があるかもしれないが、やはり文化史を重視する傾向になっていることは事実であるようだ。ただ、一つ救いがあるなら、語句指定があったことであり、何とか想像力を働かせて部分点をもぎ取ることができたかもしれない。<b>難。</b>問 5…阿仁銅山などにおける煙毒などの鉱山被害にさらされるようになった背景を、16 世紀以降の鉱物資源開発と利用を関連させながら述べさせる問題。この問題の難しいところは、教科書に鉱山開発史の子細についてクローズアップして書いてあるわけではなく、日本史論述のテーマとして聞かれることもほぼなく、その部分がまさか問題になるとは思いもしないということであり、加えてこの問題で 300 字弱ほどの字数を稼ぐ必要があるということである。鉱山被害が頻発した背景としては、鉱山開発の活発化に触ればよく、近世初期の銀山への神谷壽禎の灰吹法の導入などを経て、石見大森銀山などで産出された鉱産資源は戦国時代以来の金貨・銀貨・銅銭などの通貨・決済手段として用いられたり、南蛮貿易や朱印船貿易、長崎貿易などにおける輸出品として、また、鉄はたたら製鉄により玉鋼となり、刀剣や鉄製農具や工具などに加工された。江戸時代の 17 世紀後半以降の金銀産出量の減少と、海船互市新例などによる金銀流出を防ぐ貿易制限、その代替として別子銅山・阿仁銅山などにおける銅の採掘が活発化・重要化したことにも触れる必要があるかもしれない。そのように銅山の産出が活発化したことが煙毒などにつながる労働環境の悪化をもたらしたと考えれば良いか。詳説日本史研究 p267 には上記のような鉱山開発の記述がみられるが、そもそもこのような部分が論述問題として聞かれるとは予想もできないのではないかと。石見大森銀山・佐渡金山、生野銀山、院内銀山、阿仁銅山などの固有名詞を羅列して字数を稼ぐこともできたかもしれない。<b>難。</b></p>	難

<p style="text-align: center;"><b>II</b></p>	<p>大山巖/スペイン風邪流行の背景となったシベリア出兵/岩倉使節団・津田梅子の功績/条約改正交渉および洋風化政策における山川捨松の仲介の役割</p>	<p>大問 2 は、今年の大問 3 つの中では、過去問の内容を用いたりして最も点数を稼ぎやすい大問であったと感じる。ただ、決して容易な問題が出たわけではなく、コロナウイルスという時事と関連のあるスペイン風邪という教科書範囲外の内容が生じた背景を、1918 年というヒントで間接的に聞いたり、山川捨松の役割を 1880 年代というヒントから聞いたりするなど、具体的な年代とその時代を特徴づける事象が紐づいていないと苦勞する問題があった。また、新五千円札の顔となる津田梅子の出題もあるなど、時事に敏感であった人は有利であったろう。<b>問 1</b>…大山巖。「大山公爵」というヒントがあるため名前は思い出せた人はいたと思うが、漢字が難しく、マニアックな知識である。<b>やや難</b>。<b>問 2</b>…新型コロナウイルスという時事を考慮したものだと思われる。スペイン風邪についての教科書の記述は皆無であるため、ある程度想像力を働かせる必要がある。1918 年当時は第一次世界大戦末期であるが、この時代にスペイン風邪が日本にまで到達するのはどのような理由があるのかを考える。日本は参戦していないにもかかわらず、欧米発祥の感染症が日本にまで到達するほど大流行化したのは、ロシア革命への干渉のため、日本を含む欧米各国が軍隊を派遣したシベリア出兵であり、それがパンデミックの引き金となった。コロナ関連の時事について調べていた人は書けたかもしれない。<b>やや難</b>。<b>問 3</b>…岩倉使節団の指摘は容易。津田梅子の功績については文化史からの出題であるが、新紙幣にも登場するなど有名な人物であるため、教育関係の功績を残したことは指摘できると思う。女子英学塾(現在の津田塾大学)を創立し、女性教育・英語教育に貢献した。<b>標準</b>。<b>問 4</b>…この大問がもっとも字数を要する問題。山川捨松について知らずとも、問題の「1880 年代」、リード文の「西洋の御婦人と日本の御婦人」というヒントから、井上馨の予備会議を開いた一括交渉による条約改正交渉・欧化政策という時代背景を指摘できれば十分であり、近代国家としての体面を整えて上記の交渉を有利に進めるために、鹿鳴館などでの接待や舞踏会などにおける西洋婦人と日本婦人の円滑な意思疎通の仲介を行った。この問題が唯一過去問を参考にできるものであり、2011 年・2014 年に類題がある。<b>標準</b>。</p>	<p style="text-align: center;"><b>やや難</b></p>
<p style="text-align: center;"><b>III</b></p>	<p>人民戦線事件の記述とその内容/津田左右吉への攻撃の理由/西田幾多郎の著書/陸軍の統制派と皇道派主張の相違と二・二六事件後の両者の関係の変化</p>	<p>この大問も厳しい。去年のような戦後からの出題はなかった。過去問を参考にできる問題が無く、既視感ほとんどないであろう。特に<b>問 1</b>の「人民戦線事件」については、2019 年の「日本資本主義論争」を彷彿とさせるかなりマニアックな知識であり、内容まで書かせるのは酷である。西田幾多郎の著書については共通テストで倫政を選択していた受験生には有利であったかもしれない。この大問でも他の大問と同様に最後の問に大幅に字数を割く必要があるため、最後の問いがわからなければ 8 割を埋めるのはかなりしんどい。<b>問 4</b>については第 2 回の東進本社の問題的中していたため、受験した人はかなり有利だった。<b>問 1</b>…人民戦線事件を指摘することさえ困難。その内容まで書かせるのは非常に厳しい。しかし、人民戦線事件を指摘できなくとも、ファシズムや軍国主義に対抗する勢力結集を企図したことに対する治安維持法による弾圧、のようなイメージで何とか書くことはできた。2019 年に出題された日本資本主義論争における労働派が弾圧されたのもこの事件である。山川均、鈴木茂三郎が社会主義者が大量に検挙され、翌年には、大内兵衛、有沢広巳ら労働派の教授グループも検挙された。<b>難</b>。<b>問 2</b>…津田左右吉が攻撃された理由を説明する問題。この問題も過去問には見られない文化史であり、具体的な内容まで把握することは、意識して覚えていないと難しい。記紀神話の合理的な文献批判が皇室の尊厳を傷つけたとされ、「文学に現はれた我が国民思想の研究」や「神代史の研究」などの著書が発禁となった。<b>やや難</b>。<b>問 3</b>…「善の研究」。共通テストで倫理政経を選択していれば必ず目にする著作であり、有利であったと思うが、そうでない人にはマニアックな知識である。西洋哲学に東洋思想を持ち込んだ独自の西田哲学を展開し、「純粹経験」を主客未分の具体的経験とし、自己と対象の対立・分離以前の根本的な経験とし、この「純粹経験」にこそ真の実在があると主張した。<b>やや難</b>。<b>問 4</b>…この問題に大幅に字数を割く必要があるが、容易でない問題で、過去問にも類題は無い。第 2 回東進本社を受けていた受験生はかなり有利であったろう。この大問で字数が足りなくなって白紙状態になった受験生が多いのではないかと。皇道派は直接行動によって政党や元老・重臣などを排除して、天皇親政に基づく軍部政権を樹立することで「昭和維新」を断行しようとした。統制派は、官僚・財界などと提携して、政治・経済・文化・教育など広範な分野での新体制運動を通して実現する「高度国防国家」の建設を目指していた。皇道派青年将校による二・二六事件でのクーデタが失敗したのは、統制派が優勢に立ち、政治関与を強めるようになった。統制派は肅軍を掲げ、事件の原因が政治にもあるとして、「肅軍人事」の名の下にその改革を要求した。具体的には、事件後の広田内閣の組閣の際に、吉田茂など一部の閣僚候補を親英米派、自由主義的であるとして排除し、予備役に追い込んだ皇道派将官の復権を防ぐためと称して「軍部大臣現役武官制」を復活させるなど、皇道派を一掃し、政治関与を強めるようになった。<b>やや難</b>。</p>	<p style="text-align: center;"><b>難</b></p>